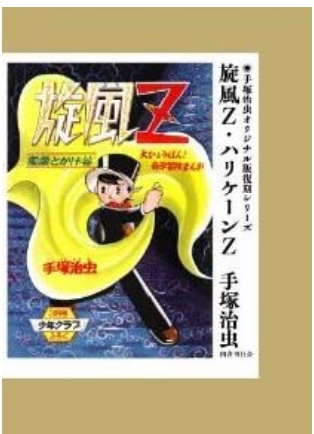


手塚治虫作品―『旋風Z・ハリケーンZ』―

はじめに

この作品は、二〇一〇（平成二二）年十一月に再復刻したオリジナル版『旋風Z・ハリケーンZ』（国書刊行会刊）講談社刊雑誌「少年クラブ」一九五七（昭和三二）一月から一九五八（昭和三三）年六月号までに連載された資料を基に読むことを試みたものであることをまずお断り申し上げておきたい。「冒険科学まんが」「熱血冒険まんが」「大冒険痛快まんが」というジャンルを手がけていた作者手塚治虫にとって重要な役割を担った作品の一つと云えよう。なぜかと云えば、単行本化することに描き替え・切り貼りは常の如くであって、セリフも時代に相応するようにと変容させていく過程を見てきた私たち読者にとって、改編前のオリジナル版を見たいというのが切なる願いではあるまいか……。

とりわけ、彩色を施した頁は圧巻そのものであると考えられよう。全集本では見ることが不可能な体裁をこの目でみてほしいと願うばかり



である。

前述したように、ストーリーそのものは単行本と変わらないのだが、これとは別に異なり部分を指摘するのであれば、作者自らがと編集者と一緒に登場して、この物語の最終回をどのような筋立てにするのかについて漫才風にかけあいながら描写されている部分ではあるまいか。これが、物語の流れを茶化してしまい、戯作風の感を超えているとも取れるからである。今、単行本版と比較してみても歴然とした思いがこみ上げてくる。差し替えを余儀なくされるこのタッチこそが作家手塚治虫の真骨頂の表出であったのだろうか。何故最終回でこんなおちゃらけをやってみせたのか、実に不思議なのである。これを解く時間が今此處に存在する。

- 2 -

正義の怪少年「旋風Z」、予告ではこの名前は決定できていなかったというから妙趣である。「冒険兒ジェット」からこの名に変容させていく少年Zが操るジェットといった作風がここに漲っている。此時作家手塚治虫は西国兵庫県宝塚市鍋野二九の二に居を構えていた。講談社の編集記者はその都度東京から関西に原稿を取りに向かっていたのであろう。その思いがあつてか、作者と記者の掛け合いが漫画に登場するきっかけとなっていたやもしれない。

- 1 -

このなかでも手書き文字は実に面白いから見ていきたい。

脅迫状「カメレオン、ガーゼをいただく 承知か しからずんば 死だ Z」〔17頁50齣・51齣〕
ここで、「しからずんば」といった漢文訓読体の表現が用いられていたりする。少年が身につける正服は、シルクハットに蝶ネクタイ、黒マント姿である。この正服だが、どのような意味合いを有しているのだろうか？この姿に仮面を施せば、「怪盗ルパン」にさも似たりである。このスタイリストのモデルだが、アメリカの作家リー・フォークのコミック『魔術探偵マンドレーク』を模倣したという。

○「ボートはそのものにあとうべし」〔180頁92齣〕
とあって、「あたふべし」のウ音便合音の表現「あとうべし」が見えている。

ことば表現では、オノマトペ表現に、

○「てかあつとひかつてきえちやつたんで……」〔58頁50齣〕

とある。また、手塚治虫は漢数字「七」を「シチ」と読まずに「なな」「なの」と読む派であることも見えてくる。

○「八月七日夜八時七分、いまのぼしよへこい！まつてるぞ。うふふふ……」〔62頁7齣〕

○「八月七日八時七分、今夜だ」〔66頁54齣〕

○「メネコシチヒキ、オネコハシヒキ……つまり牝猫は七匹 牡猫は四匹……となるぞ！」〔90頁56

齣〕

という具合に見えている。ことば表現には、

○「博士あなたはうたがいぶかすぎる。世のなかには、あなたの みかたになるものもいるんですよ」〔99頁72齣〕

といった「疑い深い」の語幹「うたがい＋ふか」に動詞「すぎ・る」を用いた複合動詞も見えている。

登場人物の名前を妙趣である。

①「真蒸探偵」〔51頁62齣〕、

②「はいゆうの手仁尾遠氏が人の目のまえでみえなくなつて」〔65頁42齣〕、

③「なんだ、なんだいヨソラヒバリかいタカチホイヅルかい」〔79頁20齣〕、

④「男女川令子」〔138頁93齣〕「男女川令子さんですか？」〔138頁98齣〕「うまくばけたな男女川令子さん」〔156頁60齣〕。